

ANY 覚え書き

杉 山 隆 一

any 及びその複合語は原則としてそのfunctionに応じてあらゆる文あるいは位置に分布し、その分布に制限はない。しかしanyはしばしばこれと対比して分布するsomeと共に論じられ、前者は否定文・疑問文に、後者は肯定文に用いられるといった画一的な記述が散見されるが、そのruleからはみ出す部分の大きさを考えるとそれを例外として扱うにはあまりにも大ざっぱすぎる。この小論ではとりあえずanyに関して主にその本質的な意味から再考してみることにする。

先に述べたようにいわゆる「一般的rule」からはみ出る、肯定文に用いられた anyを見ることはさして困難ではない。Leslie A. Hillは‘some in affirmative sentences becomes any in negative or interrogative sentences’ というruleの不備をつき、any 及びその複合語について肯定、否定、疑問の3種の文の反例をあげた表を示している。¹⁾勿論、この場合これらのfrequencyは問題ではない。Hillはこれら二つの語の差異は相互に単なる‘stylistic variant’ であるのではなく、semanticなものであると結論する。この二語を考える上においてこのsemanticな相違こそ重要で、その意味の掘下げが必要である。

同じようにこのsomeとanyの一般的ruleに関して再考を促したD. Keene、松浪両氏による suggestiveな‘guide’によれば some と any の二語の本質的な差異は前者がlimitを、後者がno limitを暗示し、また前者がdefinitenessを示すに対して後者は indefinitenessを表わすにあるとする。²⁾従ってこの差異が結局、各々主に肯定文との結合、否定文・疑問文との結合となって表われるという。

someの場合はしばらくおくとして、anyの種々な意味の基底をなすものはこのindefinitenessであろう。しかもそれはしばしば量的に、質的にlimitlessなものであるという点に留意すべきである。

まず肯定文におけるanyをみってみる。前述のように肯定文の中にanyもしくはその複合語が用いられることは極く普通のことである。次にその例文の一部を示す。³⁾

1) ‘Some’ and ‘Any’, English Language Teaching, vol. XVI, No. 2, 1962, pp. 86-89; なお、この表の中で否定文中に用いられたsomehowの例だけ見つからなかった旨の注があるが、これに対しては次の様な例文をつけ加えておきたい。

“You ever been to the States, sir?” “No.” “You ought to come some time.” “I know. But I’ve never got round, somehow, to doing most of the things that I ought to have done.” (Dacre Balsdon: Oxford Life, p. 60)

2) D. Keene, T. Matsunami: Problems in English, pp. 2-7, 1969 研究社

3) ここに引用する例文は一例を除き、すべて Penguin Modern Stories, vols. 1-8 から採った。例文の末尾の括弧内の数字は前がvolumeを、後はその頁を示す。

主語として:

But anything you say will interest us. (6—9)

and asked if there was anything I could do for him (6—62)

目的語として:

These people hide when they see anybody. (1—86)

You're the only one who knows anything. (4—13)

前置詞と共に:

there are limits to anyone's endurance. (3—66)

Coming from anyone but you that would be funny. (8—69)

形容詞として・

And any attempt to stop being ghosts,..., will kill us. (2—36)

We'll have a drink before we start any talking, man, why not? (4—60)

副詞として:

I could tattoo you anywhere, anywhere at all. (2—92)

but it would have been a patronage to recognize that any further (5—58)

以上が肯定文中にみられるany もしくはその複合語の例であるが、形態的には特異性といったものではなく、後出の否定文や疑問文における場合と変化はない。

次にsemanticな面を考えてみたい。

To this extent, anyone who sees you come into a room loves you. (2—35)

この文における anyone は 'whatever individual is chosen' (COD)で問題はない。つまり、「貴女が部屋の中に入って来るのを見る者は誰でも」ということで一応、その見る人が貴人であろうと乞食であろうと構わないわけで、そのindividualの質までは問題とされない。その意味でいわば無色である。ここでの morpheme any 一のもつ意味は単にindefiniteness, それもいわば全面的にlimitlessなものである。

She could be married to anyone, for all that I have made her happy. (3—51)

この文における anyone もいうまでもなく indefinite であり limitless であるが、細かにみると、先の anyone とは内容的に変化していることがわかる。先の文でのそれが純粋に limitless であったのに比して、この文でのそれはいわば大の方向、プラス方向への重点の傾斜がみられる。つまり、この場合、「誰とでも」とはいえそれは乞食や、ぐうたら者であっては意味ないわけで「ひとかどの男」を意味していることは明白である。

同じように次の文においては、

There are any number of changes in minor realms. (John Gunther)

any はほぼ considerable と同義である。Fijn はこのような any に関して次のようにいう。

The word "any" prefixed to a substantive—esp. a substantive expressing time,

number, amount, quantity—often imparts to it an intensive meaning, which may also be expressed and is frequently expressed, especially in the written language, by means of such adjectives as great, long, considerable, tolerable etc.⁴⁾

これは主に量的なものについて使われる場合であるが、ここにいう anyによるプラス方向への重点の移動が指摘されている。

さらにまた次のような文ではどうであろうか。

The wonder is that there are any left to catch by now. (8—100)

この文におけるanyは、やはり前二者とはそのlimitlessの内容が異なる。即ち、重点のマイナス方向への移動がそれである。この場合量的にいささかなりとも残っているのかどうか問題であり、しかもそれは質的に低価なものであっても構わない、といった意味が含まれる。もう一例みても、

I always say, any fool can learn to do what he's told. (4—67)

この場合、foolという語自身が質的に低価なものを表わしているが、anyによって更にその中でも低位にくるものをとりあげて、「そのように異常に無能なものでさえ…」という強調がなされる。従って、このanyはindefiniteでlimitlessではあるけれども、その重点が質的にマイナス方向へ移動しているという点で先の二文におけるanyoneとは異っている。⁵⁾

またこの傾向は当然、否定文においては強まる。

Anybody odd isn't so conspicuous, especially nowadays. (1—55)

Don't let anybody tell you no. (3—89)

I didn't expect anyone to come. (6—80)

He's not just anyone. He's Stephen. (5—48)

He wasn't anywhere. (2—50)

It won't be any good that way. (5—27)

There was no longer any talk of her moving. (7—50)

これらはいわゆる 'rule' に適った any の用法ということになるが、rough の謗は免かれないが、なおusefulなruleであることは否めない。前にもみたようにanyのlimitlessの内容は同一ではなくcontextによってマイナス方向、プラス方向へと変化する。そして、例文からもわかる通り否定文ではanyもしくはその複合語のほとんどにおいて無色か、あるいはその重点はマイナス方向に向いている。

4) P.Fijn van Draat: A Remarkable Application of the Word any, Englische Studien XXIV (1898) pp.155.

5) cf. C.Stoffel: The Intensive and Depreciative of any II, Englische Studien, XXVI (1899), pp.144—150.

もともとの **any** という語はそれ自体で ‘negative implications’ をもつと考えられる。⁶⁾ 例えば次のような文について考えてみると、

Any one who has read your books would know the mystery in such a question,
Professor. (3—91)

これは事実上、次のような文とほぼ同義である。

Those who have not read your books would not know the mystery in such a question.
さらに、

Much time and much quiet ripening is needed for anything to be finished and
perfect. (7—75)

これもまた次の文と表裏をなす。

Anything could not be finished and perfect without much time and much quiet
ripening.

このようにこれらの文において各々、最初の文は第二文のような否定文とほぼ等しい意味を持っているといえる。つまり、これらの文は形態的には肯定文であるけれども意味的には否定の要素を含んでいるといえる。その否定的要素は **any** という **morpheme** によって形成され、従ってこれ自身いわば否定的雰囲気をもっているわけで、否定文との結合の度合いが大きいということは当然であろう。

疑問文についても、普通には **any** を用いるとされるが、これは今迄みてきたように、**any** の意味の基底となる **indefiniteness** 故の現象で、その意味では当然である。つまり、疑問文では通常、事実が不確かなるが故の発話であり、従って **indefinite** な要素とは不可分である。これはまた仮定文についてもいえることで、文字通り仮定の上にたった事実は **indefinite** である。

そしてまた、答えをある程度予期して発せられる疑問文において、**any** の代りに **some** を用いるという **rule** があるが、発話者の意中である程度予測された事実は全くの **indefinite** なものではなく、**definite** とはいえないにしてもそれに近い性格のものである。従ってこの場合一応、**indefinite** な範疇には入るが、**any** とは異り、ある限定性、つまり広い意味での **definiteness** を有する **some**⁷⁾ が用いられることとなり、少なくとも **any** は不適であるといえる。

以上みてきたように、**any** の本質的な意味は **limitless** な **indefiniteness** であって、その語の使われる環境によってその **limitless** の内容が変化し種々の意味を生ずるわけである。**any** に関するいくつかのいわゆる ‘rules’ は無益ではないにしてもそれで処理できない部分が大きく問題がある。表面的、形態的分析に合せて **any** の **semantic** な面からの綿密な考察が必要と思われる。

(原稿受理昭和47年10月4日)

6) cf. P. Christophersen, A. O. Sandved: An Advanced English Grammar, pp. 189—90.

7) このことについての詳細な考察は未了である。cf. D. Keene, T. Matsunami: Problems in English, pp. 2—7.